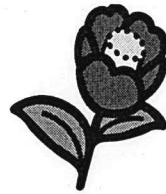


# 礼拝

令和4年1月24日  
10号



## 大島忌

～感謝の真を捧げましょう～

本日は、今日の京都文教  
学園の基礎を築かれた第三  
代校長、大島徹水先生の  
大恩に感謝する法要を営み、  
全教職員・生徒の皆さんで今  
後の学園発展のために尽く  
すことを誓い合う日であり  
ます。

大島先生は明治四年三月  
十五日、七人兄弟の六人目  
として愛知県で誕生され  
ました。当時の名を源次郎  
といいます。源次郎の母は  
我が子が僧侶になること  
をずっと希望されており、ま  
た尼僧である伯母の勧めも  
あり、九歳の時に出家しま  
した。貞照院という戒律の  
厳しいお寺で学ばれた大島  
先生は、真面目な性格で不  
正に対して怒り嘆く人物で  
あったそうです。家政女学  
校との関わりができるまで  
の間には、京都の成等庵と  
いう荒れ果てたお寺に住ま

われ、このお寺の復興に尽力されました。こ  
のとき大島先生は、廃寺復興の難しさを痛感  
される訳ですが、辛抱強くどんな困難にも愚  
痴らず努力を重ねた数年間が、先生を立派な  
人物に仕上げた要因になったといえます。ち  
ょうどこの頃、家政女学校の復興を坂根弥兵  
衛氏から懇願された大島先生は、坂根氏の学  
校を思う熱意の強さに心動かされ、命をかけ  
て家政復興を堅く心に誓われました。このと  
きが、大島先生と家政女学校との関係が結ば  
れた最初であります。

話は前後しますが、一九〇四年、獅谷佛定  
上人を中心に坂根弥兵衛氏らを設立代表とし  
て「私立高等家政女学校」が開学されました。  
「仏教による道徳教育」という開学の意図や  
教育方針、熱心な指導が評価され、生徒数が  
急増していきました。そのため校舎の増改築  
が必要となりましたが、資金面で見通しが立  
たず、一九一三年に閉校することが決定され  
ました。しかし「教育の不十分さで閉校する  
なら従うが、学校の真価が認められ、私達を  
信頼して入学した生徒を犠牲にできない」と  
の思いで、廃校反対の有志者からの寄付、当  
時主幹となった大島徹水先生の資金調達、学  
校関係者の協力により廃校の危機を回避し、  
さらに一回目の移転をも成し遂げたのでした。

一九三〇年、大島先生が第三代校長に就任  
され、校訓として清純貞淑・感謝勤労・敬上慈  
下・天物尊重を掲げ、毎週一回の全校集会での  
訓話、生徒の掃除、風紀当番による校内美化・  
整理・生徒の言動注意などを徹底して実施さ  
れました。この頃には生徒数もさらに増え、

現在の岡崎への移転が決定しましたが、土地  
購入や校舎建設等の費用をどうするか、大島  
先生以外は誰も見通せませんでした。一度目  
の移転のとき既に、大島先生は再移転の必要  
性や資金繰りの困難を予測し、「今度は独力で  
やらねばならない」と覚悟をされていました。

「一私学の校長が、一念独力で集めるには七  
十五万円（約十六億円）」という額は冷嘲を買  
うに充分な数字だ。」と報じられるほど不可能  
と思われることでしたが、先生は十六年間で  
人知れず費用を蓄えるという奇跡的な取組み  
を実現されました。その内訳は「お布施の五  
十銭から寄付の五百円を超えない」少額の積  
み重ねであり、いかに辛抱強い取り組みを継  
続されたかを思い知らされます。また、教え  
子が亡くなったといえはその母は集まった香  
典を是非にと持参し、卒業生が結婚したとい  
えば記念の寄付があり、ある卒業生は「お金  
がないのでせめて労力を差し上げたい」と子  
どもを背負い、子どもの手を引いて大島校長  
を訪れました。岡崎キャンパス設立にはこ  
うした涙ぐましいお話が数多く織り込まれて  
おり、大島先生の人となり、そしてそれ故の  
偉業を物語っているのです。また同じ頃、東  
京の増上寺の法主にも着任し、京都と東京を  
半月ごとに往復する極めて多忙な生活を続け  
られていたそうです。

遷化されるまでの三十四年間、二度にわた  
り本校の危機を救い、総合学園としての今日  
の基礎を確立された大島徹水先生は、まさしく  
学園中興の祖であります。私たちはその大  
恩に感謝の真を捧げたいと思います。